

水稻の作柄に関する委員会（平成28年度第2回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温は、一部地域を除き、全般的に平年より高く推移している。また、日照時間についても、6月を中心に平年を下回る時期があったものの、おおむね平年を上回って推移している。

今後の天候の見通しでは、全国的に気温は高いと見込まれるが、北日本を中心に降水量が多く、日照時間の少ない状態が続くと予想されている。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯ではもみ数が一部の地域を除き平年並み以上に確保されているとみられ、遅場地帯の生育もおおむね順調に推移しているものの、出穂期以降が高温傾向で推移していること等から、登熟や品質等への影響が懸念される。

また、8月中旬以降の台風第7号、第9号、第10号及び第11号による影響が懸念されるほか、いもち病や斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯においては、出穂後の高温及び8月中旬以降の寡照が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 西日本の遅場地帯においては、5月末から6月にかけて寡照傾向となった一方で、8月以降、気温及び日照時間が平年を大きく上回って推移しており、今後も高温で推移することが見込まれることから、もみ数、登熟等への影響を見極める必要がある。
- (3) 8月中旬以降の台風第7号、第9号、第10号及び第11号の影響により倒伏等が発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) いもち病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、一部で早まっているところもあるが、全般的にはおおむね平年並みと見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨 宮 宏 司 公益社団法人大日本農会 技術顧問
黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部植物生命科学科（作物学研究室） 教授
竹 川 元 章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課 予報官
中 園 江 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域東海輪作体系グループ 上級研究員
平 澤 正 国立大学法人東京農工大学 名誉教授
山 岸 順 子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構 准教授
吉 永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
水田利用研究領域北陸作物栽培グループ長